

小さな

コミュニティー

住む・集まる・つながること

北山恒

篠原聡子

川辺直哉

長谷川豪

鍋島千恵

西田司

猪野忍

山本理顕

渡辺真理

下吹越武人

編著

彰国社

ブックデザイン：柳忠行

カバー・表紙のイラスト：挟間裕子 (architecture WORKSHOP)

この本について

コミュニティという言葉は安易に使えない。

ずっとそんなふうに思い、あえて避けていた僕が、コミュニティという言葉に改めて向き合いはじめたのは、21世紀に入ってからだと思う。振り返ると、地域住民との対話の中で設計を進めたプロジェクトがきっかけだったのかもしれないが、その時はコミュニティという言葉は一切使わなかった。むしろ、コミュニティという言葉を自覚的に意識するようになったのは、大学で設計の授業を担当する中で、学生の提案にコミュニティをテーマにした作品が多いことに気づいてからだ。その多さに対して当初は違和感を覚えたが、しだいに彼らの切実な希望のようなものではないか、つまり、学生たちはコミュニティに飢えているのではないかと考えるようになったのだ。多くの提案は、地域社会の理想像としてのコミュニティではなく、もっと身近な生活の延長にあるコミュニティの在り方を模索していた。それは、

彼らの育った環境に欠落しているピースを探しているようにも見えた。

3・11以降、コミュニティの重要性が各方面で盛んに叫ばれている。その重要性はもったもなのだが、地域のコミュニティは津波によって失われたのではなく、それ以前から徐々に喪失してしまったと考えるべきだろう。では、コミュニティに対して建築は何が可能か。そのような問いに対して、建築家はそれぞれのスタンスでずっと考えてきたのだと思う。

2011年度法政大学公開講座「建築フォーラム」では、「小さなコミュニティ」と題して8名の建築家を講演に招いた。本書はその記録を中心として構成しているが、講演後の学生からの質疑応答や、8人の建築家へのアフターインタビューも掲載し、コミュニティに関する議論を深めるように努めた。また、文中には編集に参加した学生16名の率直なコメントも付している。

コミュニティという言葉は広範な解釈や定義があり、それゆえに掴みどころのない不明瞭さも伴うが、本書の8人の論者による多角的な視点が、その一考の手助けとなることを願っている。

下吹越武人

※目次

- 3 ー この本について
- 7 ー 序 いま、なぜ小さなコミュニティなのか 渡辺真理×下吹越武人
- 13 ー 第1講 コ・ハウジング 人間の関係性をつくる空間装置 北山恒
- 39 ー 第2講 コモンからコミュニティへ 篠原聡子
- 63 ー 第3講 誰のものでもない場所 川辺直哉
- 91 ー 第4講 都市の建築、都市の生活 長谷川豪
- 117 ー 第5講 関係性の凝縮 鍋島千恵
- 141 ー 第6講 新しい集合のかたち 西田司
- 163 ー 第7講 世界の小さなコミュニティ 猪野忍
- 191 ー 第8講 1住宅1家族主義から地域社会圏主義へ 山本理顕
- 223 ー 建築フォーラムについて
- 224 ー あとがき

序いま、なぜ小さなコミュニティなのか

対談

渡辺真理×下吹越武人

◎ リバタリアン VS コミュニタリアン

渡辺 ハーバード白熱教室で話題の、マイケル・サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』という本がよく読まれています。彼の言う「正義」は、古くからある自由至上主義者（リバタリアン）と共同体主義者（コミュニティアン）の対立を大きな論点に据えるものです。現在、自由至上主義に対して共同体主義の見直しの気運が高まっていると言えそうです。

建築分野では、コミュニティについて60年代ぐらいから非常に多く語られ、反対に70年代ぐらいから避けられるようになった。それは、山本理顕さんのアフターインタビューにあるように、建築設計者からの「ベンチのあの階段室をつくれればコミュニティが発生する」というよ

うな安易で安直な提案に対する反発でもあった。その後、建築分野では、コミュニティを表立って使ってこなかったけれど、3・11以降、今また社会がコミュニティというキーワードを使わないと対応できないことが起きていると思います。

下吹越 渡辺さんが話されたリバタリアンとコミュニティアンという議論が、今注目されている背景には、インターネット上で個人をベースに自由な交流やコミュニケーションシヨントールを簡単に入手できるという環境が拡がる中で、具体的な場所に根ざした社会をもう一度見直していかなるを得ないという揺り戻しという側面もあるのでしょうか。

渡辺 うん、それも面白い指摘だと思います。

歴史を遡ると、コミュニティは、近代社会以前の間

たちが持っている連帯関係(ゲマインシャフト)を示すと言われます。ところが、近代社会以降、都市・社会は急速に巨大化し、発達した交通手段によって移動範囲が拡大・拡散し、人が知り合うことが急激に多くなった。旧来の「暖かなサークル」(ローゼンベルグ)から切り離された人は行き場を失っていくわけですよ。

われわれは1回、コミュニティを捨てて、アイデンティティ(自分探し)に行った。アメリカ社会を見ていると、アイデンティティだけではやっていけない状況にあると多くの人が思いはじめています。現在、世界は、グローバルは勝ち組でローカルは負け組というものすごく単純な図式で二分されつつあります。人間もこのように経済原理だけで二分されつつあるのではないかとという潜在的な危機感があります。

下吹越 グローバルが勝ち組でローカルが負け組みという非常にわかりやすい構図は、言い換えれば経済的な格差なんだと思いますが、単一の指標によって価値観や評価軸が定まってしまう世界観に対して、コミュニティには様々なものを許容できるだけの懐の深さがあるような感じがします。

うなのか。それは、世代論として考えることができることなのでしょう。

渡辺 世代論というよりは、それぞれのスタンスの違いでしょう。

以前、『新建築』誌で、「集合住宅をユニットから考える」を連載したことがあります。そのときは、コミュニティではなくユニットとしました。その時点では、個の場所を考えることが重要だと思ったからです。

若い世代は、建築分野や都市の分野において、コミュニティという言葉が安易に使われていることに対して、理顕さん以上に批判していると思うんですね。ただし、今、僕たちが語っているコミュニティはその次のレベルになるものです。僕たちは現在の社会状況の下で「コミュニティ」にもう一度立ち戻らないといけないと思います。

日本でコミュニティを恥ずかしがらずに言えるようになったのは、やはり3・11以降だと思います。3・11によって、社会があまりに拡がりすぎ、個人ではどうにも太刀打ちできない状況が現出していることに多くの人々が気づきました。

下吹越 そうですね。3・11以前、みんなが漠然とコミュニ

それぞれのアイデンティティという多様性も全部引き受けたうえで、コミュニティが暖かさや、帰属感を支えることでうまく機能をするのかも知れません。今、こういった小さな枠組みを社会が求めている状況なんだと感じます。たとえば、インドネシアにお金を投資し儲かったということが、自分たちの実生活にどこまで結びつくのかがなかなか掴めないわけで、それとは異なる、自分たちの身体感覚で捉えられる集団あるいは社会がどうしても欲しくなるという、そのことによってバランスをとるといふ流れがあるような気がしますね。

◎ コミュニティとスタンス

編集部 今回、各講演者の話を聞いて思うのは、北山恒さんと山本理顕さんはコミュニティという言葉をダイレクトに使ってコミュニティは必要だという言い方をする一方で、若い人、川辺さん以下の世代はコミュニティという言葉は直接は使いたくないというような素振りを感じたんですが。

下吹越 西田さんは別としてね。

編集部 はい。世代におけるコミュニティの捉え方がど

ニティを求めている一方で、その言葉が非常に気恥ずかしいというか、消費され尽くしてしまった言葉なので、なかなか言えなかった。3・11の被災地は個人ベースだけでは復興できないことがはつきりしています。60年代に盛んに語られたコミュニティの議論にもう一度立ち戻らないと、この現実には立ち向かえないという危機感をみんな抱いたと思うんですね。

今回の講演者はそれぞれの切り口によって、これまでのコミュニティ論とは違うスタンスで語られていたと思います。具体的にコミュニティという言葉を使っていなかった下の世代の人たちも、かなり自覚的にコミュニティに対してアプローチをとっている気がしました。

渡辺 これまでの普通に使われているコミュニティの概念には手を触れないけれど、なんかやるぞという意味で、明らかに構えはあるよね。

◎ 安心・安全と自由

編集部 今回、「小さい」という限定をコミュニティに付けることによって、建築家にとってのコミュニティの意味を問うという企画でしたが、改めてかたちは違えど、

建築家はコミュニティを大切に考えていると言っているんですか。

渡辺 まあ、それを言ったら、昔から、建築家はコミュニティを大切に考えているんですよ(笑)。ただ、取り上げ方が稚拙だったり安易だったりした。建築の分野の外から、建築分野の言うコミュニティに関して様々なことが言われているわけで(たとえば、竹井隆人『集合住宅と日本人』)、これを、建築側はしっかりと受け止める必要があると思います。

補足すると、コミュニティと弱者の問題があります。僕と木下庸子の共著で『弧の集住体』(1998年)を書いたときに、コ・ハウジングを取材しましたが、コ・ハウジングの中には、非常にタイトなコミュニティになっているものが多いことを知りました。コミュニティは、安心・安全を確保する手段であると同時に、個人の自由を束縛するという側面もある。コ・ハウジングは往々にして自由をギブアップして暮らすことがなくもない。幸い、僕たちが行ったコ・ハウジングは、ヨーロッパ人らしくアイデンティティを持ちながら、社会とも接するやり方をやっていました。個人を消して、ある集団に完全

としたコミュニティが併存していく気はします。その点では、いろいろと議論が必要だと思いました。山本さんが、地域社会圏という顔の見える規模の設定をすることで、建築をモデル化していくというアプローチをされているのはよくわかるんですが、本当に現実的な仕組みをつくるためには、当たり前ですが、建築だけの提案だけでは難しいと思います。

渡辺 理想のコミュニティはパラダイスみたいなものだが、パラダイスはアダムとイヴがリンゴを食べたときにもう失われているから、どんなコミュニティにも究極の善はなく、ある譲歩が必ずあるはずだとジグムント・バウマンが言っています。ただその譲歩が厳しすぎると、安全と自由の間に引き裂かれる。コミュニティの最小単位は家族ですが、理想の家族と言われたって現実とはなかなか理想にはならないわけだし、ある瞬間は理想ではあるかもしれないけれど、まあそれくらい大らかに考えれば、ありえないことではないじゃないですか(笑)。

編集部 コミュニティは選択できるもので、運命であるとか宿命と切り離せると考える人もいますが、そこでの問題は、誰でもが選択できるわけではないことですね。

に帰属するところにはもう戻れない。

編集部 今の話と関連するかも知れませんが、日本では、現在、地縁、血縁、社縁(会社共同体)が実際上解体しつつある中で、都市の中で暮らし続けるためのコミュニティのあり方がテーマだと思っただけです。そういう中で、建築や建築家には何ができるのでしょうか。

下吹越 西田司さんのヨコハマアパートメントは、横浜のように文化的成熟度が高い地域で個人をベースとした緩やかなコミュニティを成立させていると思います。一方で、山本さんが言われるように、日本がこれから極端な高齢化社会になっていくときに、相互扶助を前提とした社会の構造に変えていかなければいけないだろうとも思います。弱者のウェイトが大きくなるときに、個人ベースでは支えきれないのには目に見えているわけで、どこかで社会の仕組みとして構築しなければいけない。そのときに建築もこれまでと違ったアプローチを考えなければいけないという山本さんの指摘は本当にそうだと思うんですね。

社会の枠組みの中で捉えなければいけない弱者に対するコミュニティと、個人とそのアイデンティティを中心とするコミュニティと、個人と

下吹越 少なくとも日本はそういう選択制のコミュニティに入っていると感じはしています。

韓国の建築家と話していると、韓国は定年が早く、建築界では50歳、一般の人でも55歳ぐらいで定年になってしまふ。韓国は徴兵制度があるので、働きはじめのは26〜28歳ぐらい、働いている期間は30年弱なんだそうです。退職した人たちは、結局家族が面倒を見なければならぬ。若い人に経済的な負荷が大きく、それが嫌でみんな結婚しなくて独身率が高くなっていて社会問題になっていると聞きました。最後は家族で面倒を見るといふ考え方はとてもシンプルでいいと思うと返答すると、韓国の建築家は、そういう問題を社会の問題としてなんとか取り組もうとしている日本は素晴らしい国だということですね(笑)。

地縁・血縁のコミュニティはすぐ窮屈で面倒くさいという感覚は社会の成熟に伴う現象なのかもしれない。僕はコミュニティに選択性があることはいいことだと思っただけです。一方で、子どもであったり介護を必要とする高齢者たちの選択性がどんどん失われていくわけだから、そこをサポートするためのコミュニティは絶対

に必要だと思われ、それが成り立つための建築を構想しなければいけないのは自明だと思います。でも、完全なコミュニティはないんですね、渡辺さんが言うには(笑)。

◎ リアルと集合

編集部 建築は、どこまでもリアルなものとして存在するものですね。

渡辺 建築は場を決定してるわけですからね。それはすごく大きいと思いますよ。

下吹越 サイバー空間と比べると、建築は不自由なコミュニティになるわけなんですよね。その不自由さは、僕たちがボディを持っているのと同じで、逃れることのできない現実であり、むしろ健全なあり方であるような気がします。建築はずっとそういうことを考えてつくってきた世界ですが、以前に比べると具体的な社会や環境を対象としていることに自覚的になってきたように思い

ます。

これまで制度や仕組みとして捉えられがちなコミュニティを、大きさを想定して何人ぐらいのグループかと、実感が持てるサイズを設定することでリアルに捉えようとしているのではないのでしょうか。1960年代と今のコミュニティのアプローチの仕方がまったく違うのは、そこかも知れませんか。

編集部 確かに、北山さんの学校の場合は150人という集合論だし、山本さんの場合には500人という集合論ですね。

渡辺 n人じゃなくてね。

下吹越 そういふ感じはします。そうしなければ、われわれは今の拡散する世界で自分のアイデンティティを見失ってしまう。もう一度具体的なスケールの中に立脚点を探すのは自然な流れだと思えますね。

第1講

コ・ハウジング

人間の関係性をつくる

空間装置

北山 恒

建築の概念が変わりつつあると、みなが思っていた。それを、3・11が顕在化させたと、著者は言う。もはや、建築の主題は、作家の表現行為ではなく、コミュニティをつくることではないのかと、150人を基本的な集合として計画した小学校、住宅のパブリックとプライベート関係の転換をはかる住宅をもとに建築の変容を追う。著者による、東京の木造密集地帯に向けた路地核プロジェクトは、コミュニティ再生への提案である。

●きたやま・こう

1950年生まれ。横浜国立大学大学院修士課程修了。1978年ワークショップ設立(共同主宰)を経て、1995年横浜国立大学助教、architect WORK SHOP設立主宰。現在、横浜国立大学大学院Y-GSA教授。横浜市都心臨海部・インナーハーバー整備構想や、横浜駅周辺地区大改設計画に参画。2010年、第12回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展コミッションナー。

【主な作品】

祐天寺の連結住棟／洗足の連結住棟／公立刈田総合病院(共同設計)／白石第二小学校(共同設計 1996年)

【主な著書】

主な著書に『ON THE SITUATION』(TOTTO出版)／『建築をつくることは未来をつくることである』(共著、TOTTO出版)など。

人間と物質環境

3・11の津波で流された風景は自然と涙が出てくるような光景です。ハンナ・アーレントという哲学者が『人間の条件』の中で、人間は物質環境によって定義されると言っているように、村や町という環境があるから私たち人間が定義されるということが出来ます。そういうものが全部流されてしまうと、私たちはいったい何なのだろうという、そういう気がします。

仕切りがない避難所に人間が放り込まれたときに、相互の関係性をつくる手だてがなくなってしまう。空間をコントロールすることによって、私たちは、コミュニティないし個人の関係や距離を調整している。それがない避難所には、すごいストレスがあるそうです。避難所から仮設住宅へと目を移すと、もともとの環境から引き離されて収容された人たちは、相互の人間関係が希薄になっていく。

今回の3・11でわかったことは、人間を取り巻く物質環境が消えてなくなると、何をもとに私たちが生きていくのかわからなくなり、また仮設住宅という環境では、

安定するといえます。人間という存在にはそれぞれ顔と名前があり、それぞれが様々な性格、記憶等、膨大なコンテンツを持つ塊です。150人くらいまではその人の名前と顔が一致して、その人がどんな人かという経歴かもわかる。それはアメリカの大統領でも、子どもも同じくらいの数だといえます。人間は、実は150人くらいの中で生きていて、そんな存在です。後で知ったのですが、社会学の領域でも原始集落の規模は150人くらいの集団であるという報告があります。



fig-1 群衆の中の孤独な個人



fig-2 私たちという世界



fig-3 白石市立白石第二小学校

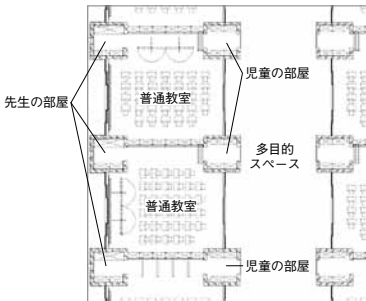


fig-4 同、教室のプラン

学校を1クラス30人くらいのクラスルームという単位ではなくて、150人くらいの単位、「ハウス」という概念でつくったほうがいいという、佐藤さんの提案を受けて設計をするんですが、小学校の設計は文部科学省が細かく規定しております、調整がひと苦労です。教室の面積は65㎡、天井高は3mというように細かく決まっている。決められた要素の組み合わせでしか小学校はできない状態です。

上から見て、とんがり屋根があるのがひとつのクラス

人間同士の関係が分断されてしまう、ということでした。

関係の単位、小学校の設計

私たちが生きているのは、自分の周りにかわりを持つ100人くらいの人間が織りなす世界です(500)。

今日のこのクラスルームにいる人たちは、お互いが顔や名前を知っていたりという関係ですが、私たちがこういう関係性の中に生きていると思います。

もう10年以上前に宮城県白石市で小学校を設計しました(吾原太郎と共同)。そこには、アウトドア教室というつもりで160人くらいの椅子が置いてあります(500)。

杭を打ってある椅子です。佐藤さんという教育学者と相談しながらこの小学校の設計をしました。小学校のクラスルームの単位はだいたい30人くらいですが、30人ひとクラスという基準の根拠は、日本の就学年齢になる子どもたちを教員の人数で割るとちょうど30人くらいだからというだけなんです。では、本当に人間関係性がちょうどいい社会を成立させる人数はどのくらいか。

佐藤学さんは、120人から160人くらい、まあ150人前後くらいの人の中っていると人間はすごく



fig-5 普通教室より中庭方向を見る



fig-6 教室感のパーティションをとったところ



fig-7 多目的スペース

ルームですが、それがいくつか束ねられてひとつの「ハウス」をつくるというように設計をしています。

このとんがり屋根の中に入ると、周囲が全部ガラス建具や可動建具で仕切られているだけなので、お互いの視線が通い合う(Fig.5)。子どもたちはひとつのクラスルームの中で教育を受けているというよりは、もう少し大きいハウスの中で教育を受けているという感覚をつくる、ということをやりました。

この写真では、教室の机、椅子列が同じ方向を向い

担任の先生がいて、その支配の中に30人

が置かれ、その中で人間関係をつくれな
い子どもはそこからはじき飛ばされる状
況です。それが150人くらいになると、
30人のスケールでは人間関係
性ができなかつた子どもでも他に関係性

を持つてることになります。また、クラスという概念が緩
やかにたつて運動会のクラス対抗が成り立たない、とも
聞いています。

150人を束ねるために、真ん中に教室と同じ幅を持
つ大きいスペースがありますが、これは多目的室という
名目をつくつた廊下のような場所です(Fig.7)。建築家の
役割は、子ども同士の関係づくりであるという意識を持つ
た途端に、コミュニティにコミットできます。そのあたり
が、建築の醍醐味、建築の持っている力だと思えます。

メタボライジング・シティ

ここで少し話を交えて、気配と気配りを取り上げます。

気配と気配りは同じ字で、「気配」は人の様子や動作が
わかること(受動)、それに対して「気配り」とは自ら気

ていますが、本来は自由にできるようになっています。
そして黒板はキャスター付きでどこにでも持って行け、
パーティションをとれば、空間は一体になるという工夫
を重ね、クラスルームがもう少し解体して、溶けていく、
そのようなものをつくらうと思いました(Fig.6)。

これをやってわかつたことは、学校のクラスという単
位をルーズにするなかでいじめがなくなりました。いじ
めが起こる背景には、30人くらいの小さな人間関係の中
で逃げ場がなくなる子どもが出てくることがあります。

を配ること(能動)です。この両者が同時

にあるような関係は、アジアの世界、私
たちの社会では当たり前にあることで、
私たちの作法というかマナーとなってい
ます。

ところが、西洋社会ではパブリックと
プライベートという概念によって空間が明快に分けられ
ています。パブリックとプライベートは西洋社会が20世
紀、または19世紀半ばくらいからつくり始めた概念で、
20世紀のモダンデザイン、近代建築の根底にはそれがあ
ると私は考えています。それに対して、気配を感じ気配
りを要請する空間というのはモダンデザインには存在し
なかつたと思います。

ヴェネチア・ビエンナーレで展示をしたものを紹介
します。これは、「City of monachism」と名づけました
(Fig.8左上)。パリの航空写真を見ると、ブルバールと
いう道路に気が付きます。それが街区を切り刻んで中に
入っている。これは、オースマンという行政官一人の権
力で都市を切り刻んでつくつたわけですが、放射状のス
タープランになっています。放射状になっているのはA

コメント①

この小学校の空間形式はこれまでの小
学校とは異なり、新しい子ども同士の
関係を示している。このような
ことが建築の主題であると著者は述べ
るが、関係やコミュニティはいつも明
確に建築化できるものなのか。(R・S)